聾唖教授手話法　　砂土原すゑ編

聾唖教授手話法　【目次】

第一	数の部	一頁
第二	時の部	二頁
第三	貨幣の部	五頁
第四	色の部	七頁
第五	天文の部	八頁
第六	地理の部	九頁
第七	居所の部	十一頁
第八	人倫の部	十三頁
第九	被服の部	二十頁
第十	飲食の部	二十三頁
第十一	殼菜の部	二十六頁
第十二	果実の部	二十九頁
第十三	草木の部	三十頁
第一四	獣類の部	三十一頁
第一五	鳥類の部	三十三頁
第一六	魚虫の部	三十四頁
第一七	器具の部	三十八頁
第一八	雑の部	四十頁
第一九	形容の部	四十二頁
第二〇	日用語の部	四十八頁

目次終

聾唖教授手話法　【奥付】

明治三十五年十月二十八日印刷
明治三十五年十月三十一日発行
明治四十二年八月五日再版発行

編集兼発行者　砂土原　すゑ
印刷者　鹿児島市長田五十六番地
　　羽生猛夫
印刷所　鹿児島盲唖学校印刷部
発行所　鹿児島市長田町百四番戸
　　私立鹿児島盲唖学校

【時の部】

今日	掌を下に向け一二度押さえ打つ如くす（今も今年も同じ）
明日	一つ指を出し手枕し起きる真似をなす
明後日	二つす
昨日	食指を伸ばして肩の辺に上げ二度計り後ろを指さす
一昨日	食中二指をもって昨日と同じくす　　その他之に倣う
朝	拳を手枕し頭を上げると共にその拳を下ろす
夕	両手または片手にて円形を作り日の傾き没する手勢をなすまた掌を横向きにして開きたる手を前に出し指先を下に回し降ろす
夜	掌を外方に向けたる手を小さく開きたる眼前に挙げ細く左右に動かす
明朝	明日と同じもし強く之を区別せんと欲せば旭の昇る手勢を加えるが可ならん
正午	食指の上に中指を重ねる
以後未来	掌を向こうにして手を前方に押しやる
以前過去	未来の反対なれば前方に出したる手を後ろに肩の辺まで引き寄せる
時刻	両手の食指を並べ接しその元を軸として右の食指を一回転する（数時間なれば数回転する
一時	同上の手勢をなして一を示す
遅時	時刻の過ぎたることを表わす
早時	食指の先に当てたる拇指を弾き上げると同時に手を少し挙げる
終日	同右の拇食二指にして円形を作り脇の方より始めて高く己の前に弧を書き日出より日没までなる手真似をなす
毎日	拇指より順々に五指を屈しその度毎に寝る真似をなし続ける
隔日	五指を出し一つおきに指示すか又は食中二指を開きたて翻す如く動かしつつ手を横にやる
後日	以後と同じ或いは打つ如くに動かしつつ手を前に進む
先日	手を肩の辺に上げ後方を叩く如くにして幾日も前に往き去りたることを示す或は指折り数え知らぬと言い同上の手真似をなす
一年	左の手を軽く握りて臼の形を作り右の食指を杵として餅つく真似をなしその指先を上げて一を示す（女子には羽子突く真似をなすもあり）
二年	餅つきて二つを示す
春	掌を上に両手を拡げ腹の辺より押し上げること二三回す（暖の意）
夏	顔に汗の垂れる手勢をなし左の手にて襟を少し拡げ右手にて扇ぐ如くす
秋	両手にて前の方より空気を胸の辺に掻き寄せる如くす（涼しき意）
冬	両手を握りて縮めふるえる如くす
この頃	右手の掌にて右肩上において前後を押す如くす

聾唖教授手話法

明治35年に刊行された
かなり古いわが国の手話辞典

2003/10/4 1

『聾唖教授手話法』とは？

- 明治35（1902）年に10月31日に発行された、わが国でかなり古い部類に入る手話辞典である。
- 現在、鹿児島県立図書館に保管されている。
- 編者は、「砂土原 すゑ」である。
- 原本は、B6サイズで、全部で58ページある。
- すべて縦書き文章で書かれている。

2003/10/4 2

『聾唖教授手話法』目次

第一	数の部	一頁
第二	時の部	二頁
第三	貨幣の部	五頁
第四	色の部	七頁
第五	天文の部	八頁
第六	地理の部	九頁
第七	居所の部	十一頁
第八	人倫の部	十三頁
第九	被服の部	二十頁
第十	飲食の部	二十三頁

2003/10/4 3

『聾唖教授手話法』目次（続き）

第十一	穀菜の部	二十六頁
第十二	果実の部	二十九頁
第十三	草木の部	三十頁
第一四	獣類の部	三十一頁
第一五	鳥類の部	三十三頁
第一六	魚虫の部	三十四頁
第一七	器具の部	三十八頁
第一八	雑の部	四十頁
第一九	形容の部	四十二頁
第二〇	日用語の部	四十八頁

2003/10/4 4

『聾唖教授手話法』の目次について

- 目次は、20項目ある。
- 手話を分野別に分類し、体系よく整理されている。
- 編者のセンスが光っている。
- この本を発行した目的や手話の使い方の説明、凡例などがまったく載っていないので、図書としては、私的な発行物（記録）に入るかもしれない。
- 本文のうち「時の部」を選び、全文をみんなで読んでみよう！

2003/10/4 5

時の部（1）

今日	掌を下に向け一二度押さえ打つ如くす（今も今年も同じ）
明日	一つ指を出し手枕し起きる真似をなす
明後日	二つす
昨日	食指を伸ばして肩の辺に上げ二度計り後ろを指さす
一昨日	食中二指をもって昨日と同じくす　その他之に倣う

2003/10/4 6

時の部 （2）

- 朝　拳を手枕し頭を上げる共にその拳を下ろす
- 夕　両手または片手にて円形を作り日の傾き没する手勢をなすまた掌を横向きにして開きたる手を前に出し指先を下に回し降ろす
- 夜　掌を外方に向けたる手を小さく開きたる眼前に挙げ細く左右に動かす
- 明朝　明日と同じもし強く之を区別せんと欲せば旭の昇る手勢を加えるが可ならん
- 正午　食指の上に中指を重ねる

2003/10/4　7

時の部 （3）

- 以後未来　掌を向こうにして手を前方に押しやる
- 以前過去　未来の反対なれば前方に出したる手を後ろに肩の辺まで引き寄せる
- 時刻　両手の食指を並べ接しその元を軸として右の食指を一回転する（数時間なれば数回転する）
- 一時　同上の手勢をなして一を示す

2003/10/4　8

時の部 （4）

- 遅時　時刻の過ぎたることを表わす
- 早時　食指の先に当てたる拇指を弾き上げると同時に手を少し挙げる
- 終日　同右の拇食二指にして円形を作り脇の方より始めて高く己の前に弧を書き日出より日没までなる手真似をなす
- 毎日　拇指より順々に五指を屈しその度毎に寝る真似をなし続ける

2003/10/4　9

時の部 （5）

- 隔日　五指を出し一つおきに指示すか又は食中二指を開きたて翻す如く動かしつつ手を横にやる
- 後日　以後と同じ或いは打つ如くに動かしつつ手を前に進む
- 先日　手を肩の辺に上げ後方を叩く如くにして幾日も前に往き去りたることを示す或は指折り数え知らぬと言い同上の手真似をなす

2003/10/4　10

時の部 （6）

- 一年　左の手を軽く握りて臼の形を作り右の食指を杵として餅つく真似をなしその指先を上げて一を示す（女子には羽子突く真似をなすもあり）
- 二年　餅つきて二つを示す

2003/10/4　11

時の部 （7）

- 春　掌を上に両手を拡げ腹の辺より押し上げること二三回す（暖の意）
- 夏　顔に汗の垂れる手勢をなし左の手にて襟を少し拡げ右手にて扇ぐ如くす
- 秋　両手にて前の方より空気を胸の辺に掻き寄せる如くす（涼しき意）
- 冬　両手を握りて縮めふるえる如くす
- この頃　右手の掌にて右肩上において前後を押す如くす

2003/10/4　12

『聾唖教授手話法』 奥付

- 明治三十五年十月二十八日印刷
- 明治三十五年十月三十一日発行
- 明治四十二年八月五日再版発行
- 編集兼発行者　砂土原　すゑ
- 印刷者　鹿児島市長田五十六番地　羽生猛夫
- 印刷所　鹿児島盲唖学校印刷部
- 発行所　鹿児島市長田町百四番戸　私立鹿児島盲唖学校

2003/10/4　13

編者の 砂土原 すゑ とは？

- 明治32年3月31日から明治33年3月31日までの1年間、東京盲唖学校に勤務していたという記録がある。

【砂土原が就任していた時のろう教師】

- 吉川 金造　明治26年3月～明治33年3月（第2回卒業生）その後豊橋盲唖学校に転任
- 片桐 貞吉　明治28年3月～明治35年3月（第5回卒業生）
- 江島 安之助　明治32年3月～明治35年9月（第2回卒業生）

2003/10/4　14

鹿児島盲唖学校の創立

- 山之口町にある民家を借り、私立の『鹿児島慈恵盲唖学院」の看板を掲げ、職員4名生徒8名（盲部5名、聾唖部3名）で開校式を挙行した。
- 時に明治36（1903）年2月2日。これが本校の前身であり、（以来この日を創立記念日として、記念式典と記念行事を催している）初代校長トップ南雲總次郎氏は、このとき25歳であった。

（鹿児島県立盲学校のサイトより）

2003/10/4　15

この本が発行されたのは…？

- この本は、初版が明治35年10月に発行されたものだが、鹿児島盲唖学校の創設は明治36年2月である。
- 奥付をよく読むと、鹿児島盲唖学校として発行したのは、明治42年8月であり、しかも「再版発行」と書いてあることがわかる。
- つまり、この本は鹿児島盲唖学校として発行されたものではない。初版は、個人発行だったのである。
- 最初、この本は何のために発行されただろうか…？

2003/10/4　16

この本が示すものは…？

- 明治初期の手話記録として貴重なものである。
- 明治35年当時、わが国の手話はすでに完成のレベルに達していたことを証明している。
- 手話の記述やその分類方法について、よく工夫がされている。何を参考にして作ったのだろうか？
- 東京盲唖学校など、当時の教育状況の研究解明に大きなヒントを与えてくれる。

2003/10/4　17

この本で考えられる研究課題（1）

- 砂土原 すゑ とは、どういう人物なのか？ 何のためにこの本を発行しようとしたのか？
- 明治35年当時の東京盲唖学校は手話による教育であったと察するが、どういう内容であったか？
- 砂土原は、東京盲唖学校に1年しかいなかったのに、なぜこの本を編集することができたのか？ また、なぜ鹿児島盲唖学校で再版発行したのか？
- 鹿児島のろう教育に対して、この本が果たした役割とは何だったか？

2003/10/4　18

この本で考えられる研究課題（2）

- この本に掲載されている手話は、今も鹿児島で使われているものかどうか？ その割合は？
- 手話（単語や意味）は現在も鹿児島で通用するか？ もし変化したとすれば、どのように変化したか？
- 東京に在住する年配の方は、この本の手話単語をどのくらい知っているのか？
- 鹿児島以外の聾学校や地域に影響したとすれば、どんな手話がどのように伝えられていったか？

2003/10/4 19

さいごに

- 皆さんの地元には、古い貴重な資料が埋もれているかもしれない。これを発見したときは、まず地元で内容を吟味して、分析研究してみてほしい。
- 歴史研究には決まった形というものは存在しない。が、他の方の研究方法を参考にすることは有益である。
- 手話の歴史を研究することは、ろう文化を考えていくうえで一番大切なことである。ろう者しかもっていない視点というものを生かして取り組んでほしいと思う。

2003/10/4 20